

## 講評

高松キャンパス  
一般教育科 長原しのぶ

平成28年度高松キャンパス夏休み課題文の総数は584篇でした。読書感想文が149篇、千頁読破記が169篇、体験文が266篇という内訳です。その中から各文門の入賞作品が決まりました。

読書感想文の優秀賞は機械工学科4年喜多條勝希君の「読書感想文」と機械電子工学科3年船越瞭太君の「旅をする木」、機械電子工学科2年鎌谷仁君の「『夢をかなえるゾウ』を読んで」です。また、佳作には機械電子工学科3年香西秀哉君の「『学ぶ』とは、何か」と1年1組森悠輔君の「今後の自分を考えるための本を読んで」が選ばれています。

読書感想文は色々な本が登場するのでいつも楽しく読ませてもらいますが、その多くは本の内容を説明するものです。その本を読んだことのない人を想定してある程度の粗筋を書くことは必要ですがそれだけで終わってしまっただけではもったいないです。今回選ばれた入賞作はどれも本の内容ではなくその本と向き合った自分自身を語っています。

例えば、船越君は読む以前と以後では変化した自分に気付いたと言っています。また、鎌谷君は自分だったらどうするかを想像しながら本の世界に入り、そこから得た刺激を今後の高専生活に活かす方法を考えています。入賞作は、それぞれの書き手の思いが読み手の心を捉えたのだと思います。

千頁読破記の優秀賞は機械電子工学科4年高木了司君と建設環境工学科3年野崎ゆなさんです。佳作には1年1組武上里咲さんが選ばれました。いずれの入賞者も千頁になるように数冊の本を選んだというのではなく、ある目的をもって千頁を読んだという印象があります。これは大事な意識ではないでしょうか。

高木君はフィリップ・K・ディックのSF小説、野崎さんは芥川賞を受賞した村田沙耶香の6編、武上さんは太宰治の作品を対象にしています。例えば高木君はフィリップの描くSFの世界と現実の世界を合わせ鏡のようにして今後の科学技術の進歩を想像しています。野崎さんは一つ一つの作品を詳細に解説するのではなく全体の中からうかがえる作者の考え方に注目し、自分とは異なる意見や視点を受け止めていく大切さを学ぼうとしています。目的は様々ですがそれぞれが千頁への挑戦から明確な意味を見出している点が高く評価できます。

体験文の優秀賞は機械工学科2年福本遼太郎君です。佳作には電気情報工学科3年谷岡由季さん、建設環境工学科2年神崎大雅君、1年2組大野花香さんが選ばれました。福本君は修理したいためにバイクを購入し、夏休み

をバイクの整備に費やしました。人とは少し違う体験をしたことはもちろんですが、修理を行う過程で接した多くの人たちとの交流も体験文には生き生きと描かれています。体験を通して表現された書き手の気持ちが読者に伝わったのだと思います。

## 詫間キャンパス

## 一般教育科 国語科

平成28年度から、「読書感想文コンクール」は「図書館文芸コンクール」に生まれ変わった。第1回となる28年度には、多くの個性豊かな作品が集まった。その中から最優秀・優秀を受賞したのは以下の諸君である。

読書感想文部門は、優秀賞に2ITの澤君「アドラー的思考」、1ITの蔵本君「『14歳の水平線』を読んで」、1CNの佐竹さん「『アンマーとぼくら』を読んで」が選ばれた。三者とも自らの思いを素直に表現した力作ではあったが、いずれも読書感想文としての体裁にやや合致せず、最優秀は選ばれなかった。

小説部門は、最優秀賞に2ITの大敷賀さん「名前」。優秀賞に2ITの長谷川君「TURNING POINT」、1ITの高松君「不可思議との遭遇」が選ばれた。受賞作品は、大敷賀さんが純文学系、長谷川君は青春小説系、高松君はダークファンタジー系と、バラエティに富むラインナップとなった。「名前」は「走れメロス」の事前譚として、決められたゴールを目指す内容の作品。誰もが知る物語へ、読者を飽きさせずに描ききることに成功している。「TURNING POINT」はライトな内容（高校生の青春）を読みやすい文体で軽やかに綴った好編。ただ、その軽さ故に短編小説としてのインパクトに欠けた。「不可思議との遭遇」はクトゥルフ神話をベースにした意欲作。物語として読ませる面白さはあったが、構想と原稿用紙の枚数制限とがかみ合わず、ご都合主義とも受け取れるやや舌足らずな展開が残念なものとなった。

短歌部門最優秀の2ES好井さんは、個人最多の7首を応募してくれた。受賞作「触れる手と優しい声が嬉しくて少し見えない君の本心」は男女の恋心が描かれており、また誰もが感じる恋心を端的に示した素敵な短歌である。短歌の基本は、やはり恋心を歌うという和歌の伝統にあり、そのような意味で、俵万智のような男女の心の微妙なかけひきを描いた作品として秀逸である。「優しい声が嬉しくて」の後に、そのまま嬉しさを表現していたとしたら、優れた歌にはならない。「嬉しくて」の後に、心の不安を描いたところが、多くの人の共感を呼ぶ作品になったといえよう。優秀賞の2IT竹嶋君の短歌は、「梅雨明けて 道路が飾る 水鏡 蘇らせる 子どもの記憶」である。「道路を飾る」としてしまいがちだが、それを「道路が飾る」としたことで、道路の擬人化に成功しており、その水鏡を見ると子どもの時がよみがえる、というノスタルジーあふれた作品である。優秀賞の1ITの

前山さんの短歌は、「北風が ほほに触れて 寒い朝 ぬくもり 求め ベダル踏み込む」である。この歌は、通学の時の様子等を、軽快に描いた作品として優秀賞を獲得した。この歌に関しては、解釈の多様性は認められないが、学生らしい歌として好評を得た。

俳句部門最優秀の2ES塩冶君の句は、「空蟬や はせる 思いは かなったか」。俳句は、季語を入れなければならない、一か所「切れ」を設ける必要がある、等の当然ながらの約束事があり、応募作品の中には季語のないもの、季語が二つ使われているもの、切れが全くみられないもの、これらが多くあった。季語がなければ「川柳」になり、「切れ」がなければ単なる「標語」になってしまう。俳句は「切れ」があることによって、二つの異なる情景を、また心情と景色の二つを、想像のなかで結び付ける、という機能を持っている。塩冶君の句は「空蟬や」で切れて、セミの抜け殻を表示し、その上で「はせる思いは かなったか」とセミの一生を謳う。「はせる」には「駆け抜ける」の意味の「はせる」と、「思いをはせる」の「はせる」の二つがある。地面の下での長い生活から地面の外はまだ見ぬ世界に「思いをはせ」、本当に短い一生を

「かけぬけていった」「はせる思い」を詠んだ秀逸な作品である。優秀賞の2ES間部さんは、「母の夢 手渡されたか 金木犀」が優秀賞となった。この句も、「手渡されたか」と「金木犀」との間に、完全な「切れ」「断絶」がある。そこが様々な余情を作り出しており秀逸である。同じく優秀賞の1ESの大西さんの句は「屋台にて 迷う幸せ 夏祭り」である。これは、非常に軽快に、夏祭りの状況を詠んだ句として、ストンと分かる。その軽快さが好評をえたのだろう。ただ、「切れ」「断絶」があまりなく、「屋台にて」と「夏祭り」が同じような連想でつながってしまったのが、もったいない。

なお、書評には応募がなかった。また、今年度のグランプリは残念ながら「該当作品なし」となった。

最後に、今回短歌・俳句部門で最終選考に残ったいくつか、インターネットからの剽窃だった。剽窃は絶対にしてはいけない、犯罪行為としての認識が必要である。そのような学生の国語の成績は0点となってしかるべきかと思われるが、そのような行為をしてしまう学生がいたことは、非常に残念なことだ。

## 入賞作品紹介

〈高松キャンパス 読書感想文〉

優秀賞

### 夢をかなえるゾウ

機械電子工学科2年 鎌谷 仁

「おい、起きろや」その声で目ざめた僕の目の前にいたのは、なぜか関西弁で話すインドの神様ガネーシャでした。これまで自分自身を変えるために色々なことに挑戦し、どれもうまくいかなかった僕は、人間の体に象の頭、四本の腕を持つガネーシャに、自分を変えるための課題を一つずつ出されることとなります。

課題、と聞くと大変そうですが、実際には「靴をみがく」とか「トイレ掃除をする」など、日常生活において負担にならない様なものばかりです。主人公である僕は、このように地味な課題を半信半疑ながら少しずつ行っていく。とりあえず大学を出て、就職したものの人とのコミュニケーションで疲れやすく、会社でも目立った活躍のできない僕は、課題を通して今まで足りなかったものや、欠けていた感情などを少しずつ知っていくこととなります。

現在本屋さんには、偉い人の自伝や、成功するための本などがあふれていると思います。それらの本が売れているにもかかわらず、なぜ成功する人が増えないのでしょうか。それは、読者が本を読んでも何もしないから

でしょう。ガネーシャが言うことには「それは、『面倒』だからや。世の中のほとんどのやつらが凡人やってんの、そいつらが『面倒臭がり』やからや。」普段は冗談の多いガネーシャですが、時には真面目に人を悟すのです。この言葉は自分にも当てはまるのではないかと思います。

規則正しい学校の生活から解き放たれる長期休みは、だらだらと過ごしてしまいがちです。去年の冬休みもそうでした。なので、自分の生活リズムを直そうと何か新しいことを始めようと思いました。そうして毎日、日記をつけはじめました。日記をつけることで、その日一日のことを振り返ります。そうすれば反省点が思いつき、そこから明日の目標などを考えることができると思ったのです。ですから、冬休みの間は毎日日記をつけて過ごしました。ですが、学校が始まると家に帰ってきてから日記を書くことが億劫になり、気付けば日記をつけるという日々の目標は終わっていたのです。この取り組みを習慣化して毎日できていれば、次の自分への自信になっていたのでしょうか、長続きさせることは叶いませんでした。

自分のようにどうしても意志が弱い人はどうすれば良いのでしょうか。「本気で変わろうと思ったら、意識を変えようとしたらあかん。意識やのうて『具体的な何か』を変えなあかん。」つまり、目標を決めたらその目標を意地でも達成するような環境づくりが大切だということです。そもそも人間は、意識を変えることはできないのです。例えば自分の場合なら、日記帳を自分の机の上でずっと置いておけば、それを意識しながら生活するので、毎日取りかかっていたかもしれせん。

この本を読んで、自分を変えようと思っても、すぐに

変わることはできないということが、よく分かりました。どんなことも、少しずつで良いから、小さくても何かを成し遂げていくことに意味があるんじゃないかと思いました。自分を変えたいと思うだけなら、誰でもできるでしょう。ですが、いざ実際にやろうとなると難しいものです。大切なのは、何をするか決める決断力と、決めた目標を実際にやる行動力です。大きな目標を立て、それをすぐにやって成功しようとするから失敗するのです。実際にその目標を達成しようとするなら、目の前のことを一つずつ達成していき、時間をかけて目標を目指すべきです。地味なことでも少しずつ達成していけば、その一つ一つが自信に繋がると思うのです。変わるということは本当は、地味な作業の積み重ねということなのでしょう。

この本に書かれた言葉は、これからの自分についても言えることです。定期試験や資格取得、就職活動などこれから様々な困難や問題に直面するでしょう。そんな時、どうやって対処していけば良いのでしょうか。一発で成功する方法なんてありません。あせらないで、できることを一つずつやっていき、いつか達成できれば良いと思うのです。そのためには毎日の積み重ねが大事です。自由な時間は、自分の好きな事をする時間と考えられがちですが、実は自分が成功するために自由に使える一番大切な時間なのです。これをしっかりと活用できるようにしたいです。

また、ガネーシャの課題は簡単な物ばかりです。僕もこれから実践し、達成できたことを自信にしていきたいです。

『夢をかなえるゾウ』 水野敬也 飛鳥新社

## 優秀賞

### 旅をする木

機械電子工学科3年 船越 瞭汰

この本と出会ったのは、高専二年の春だった。NHKでこの本を執筆した、星野道夫さんのドキュメンタリー番組を放送していたのだ。その番組の中で触れられていた、「旅をする木」という本について興味を持ち、最寄りの書店で購入したのだった。

この本を読んだとき、私は衝撃を受けた。技術の発展に伴って、我々は本当の自然とはほぼ無縁の生活を強いられている。しかし、この本の著者は、自然の中で生と死が隣り合わせの生活をすることによって、生きているとはどういうことなのかを、日々実感しているのだ。私は、この「生きている」という実感があるかないかということ、大きな違いがあると思っている。なぜなら、我々のように毎日をただ消費するように生活していると、当たり前でないことを当たり前のように勘違いし、生きていくうえで本当に大切なことを見失い、次々と欲が発生してしまうのだ。本当に大切なことはもう手にしているとは知らずに。

また、この本は、読んでいだけで自然が目の前にあるような感覚に襲われる。我々が毎日過ごしている同じ瞬間、地球の裏腹では、もう一つの時間が確実にゆったりと流れているのだ。つまり、すべてのものには同じ時間が平等に流れていて、それは人間でも自然でも同じであるということなのだ。著者はこのことに気付くかどうかは天と地ほどの差があると言っている。実際、私もそう思った。いま生きているこの場所だけがすべてではないのだ。著者の言葉を借りるなら、あわただしい人間の日々の営みと平行して、もうひとつの時間が流れていることを、いつも心のどこかで感じていたいと思う。

著者は、二十一歳のとき友人の死を経験している。そのあと、その友人の死についてひたすら確かな結論を探していたそうだ。それがつかめないと前に進めないからだ。一年たって、著者が導き出した答えは何でもないことだった。それは「好きなことをやっとうこう」という強い思いだった。おそらく著者は友人の死を、今生きている実感をも自分にくれたと前向きにとらえ、進んでいったのだ。著者は、「かけがえのない者の死は、多くの場合、残されたものにあるパワーを与えていく。」とも言っている。友人の死に対して、時間をかけてひたむきに自分の糧にしている姿は、どこかっこいいと思えた。

実はこの本の著者は、一九九六年八月にロシアにある、カムチャッカ半島のクリル湖畔で、クマに襲撃され命を落としている。テレビの取材中、テントにヒグマが現れたのだ。ネットなどでは、危機感のなさを批判する声もあるが、私は著者が自然の中で生活したいという強い思いを持っていたのが、理由だと考えている。それは、仮に自分が死んだとしても、自然の中で死ぬのだから、幸せな人生であるという考えではないだろうか。確かに、この考えは、命を軽く見ているという考え方もあるかもしれない。だが、自然の中で死んでいくということは、ある意味、動物としての、人間としての生き方としてごく自然なことではないのだろうか。

この本は、著者が世界中を旅した記録がつつつあるわけだが、この本の解説者はこの本のことを、「ゆく先々でひとつの風景の中に立って、あるいは誰かに会って、いかによい時間、満ち足りた時間を過ごしたかという報告である。実際のはなし、この本にはそれ以外のことは書いてない。」と言っている。私はまったくその通りだと思った。確かにどの記録を読んでも、人とのつながりや、自然の中で過ごした素晴らしい時間のことについてしか書かれていないのだ。この本から、著者が世界中でどれだけ幸せな満ち足りた時間を過ごしているかがよく分かった。さすがに、この本の著者のように大自然の中で過ごし、現地の人々や現地の動物と生活することはできないが、自分が毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れていることを、日々の暮らしの中で、心の片隅に意識したいと強く思った。

この本の著者の考えには、驚かされることが多くあった。自分が今まで持っていた価値観が大きく変わったのだ。今までは自分の目の前で起きていることしか実感できず、自分が生活している、同じ瞬間に動物たちの時間

も平等に流れていることなんて思いもしなかった。しかし、この本を読んでからは、それらのことを意識することができるようになり、どこか心に余裕が生まれ、焦りや動揺のようなものを感じるようになったのだ。この本と巡り合うことができ、心からよかったと感じている。

『旅をする木』 星野道夫 文春文庫

## 〈高松キャンパス 千頁読破記〉

### 優秀賞

## 千頁読破記

機械電子工学科4年 高木 了司

僕が読んだ「変種第二号」、「小さな黒い箱」というのは海外のSF作家フィリップ・K・ディックの短編集である。収録されている作品数は九つであり、全てではないが所々同じ舞台や世界の下で話が進む。この著者の作品は宇宙人との戦争やロボット対人類の争いといった題材が多い。それ故に荒廃した世界が多く描かれる。見渡す限りの灰と、その荒野に点在する鈍色の廃墟群、旧時代の遺物となったロボットの残骸。本来なら望むべくもない未来の姿ではあるが、それでも僕にとって強く惹かれてしまう景色でもある。自分でもそんな世界のどこに魅力があるのか、その所在ははっきりしない。普段見ることのない全てが違う世界への憧れであるのか、それとも内なる破壊願望の一端であるのか。いずれにせよこの「荒廃した世界」というのはSFの重要な一要素であると僕は思う。そしてディックはこの世界を描くのがめっぽう上手かった。

短編「たそがれの朝食」は、ある一家が朝食の最中にいつの間にか灰だらけの未来世界に家ごとタイムスリップするというものであった。この短編はディック特有の廃世界は描かれてはいるがそれほど凝った構成ではない。ただ、戦争の起こる気配や怯えというのを誰しも感じとり、それを押し隠して生きる圧迫感や不安感をラストで感じさせられた。戦争を経験したことのない我々世代にとって馴染みのない感覚であるだけに一層恐ろしく映る。

短編「安定社会」はガラス球に封印されていた邪悪な都市が復活するという話である。邪悪な都市は神によって封印されたとして作中で描かれるが、その神とは神話に出る創造主のことなのかそれとも太古に高度な文明を持った人々のことなのか、なぜその都市が生まれどのように封印されたのかなど、湧く空想は尽きない。最後は邪悪な都市の住人である機械生物に人間が奉仕する姿があるが、これはディック流のターミネーターのようだと思えた。「安定社会」はディックの初期作品である。後の作品では「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」に代表されるように、現在の人工知能や有機機械に近いイメージを持つ。本作は旧態依然とした古い蒸気機関の機械が描か

れており、人工知能等のコンピュータに支配されるようなありふれたSFとは違った力強い恐ろしさがとても新鮮であった。

短編「ラウタヴァーラ事件」はディックの晩年の作であり、強い宗教観が析出している。地球人ではない全く別の思考体系を持ったプラズマ生命体によって人間の宗教観や神という存在の認識が語られる。神が人間の作り出した存在である限り人間によるそれらの考察は意味をなさない。従って異次元の視点から考察された神と我々人間の考える神の差異を用いてその本質に迫った本作は非常に独創的であり客観性があると思った。「もし語り部が自分であったなら」という考え方を根底からさせない作品というのも面白い。

SFという分野にも不思議なことに古典という流れがある。未来を描くSFに古典があるというもおかしな話であるが、しかし逆に、これから全く想像もつかない新しいSFが誕生する可能性もあるということだ。日進月歩で科学技術は進歩し大きくなるこの文明の中で、この先どんなSFが出てくるのか、非常に楽しみに思った。

『小さな黒い箱』、『変種第二号』 フィリップ・K・ディック  
早川書房 1018頁

### 優秀賞

## 千頁読破記

建設環境工学科3年 野崎 ゆな

「いらっしゃいませ。」

お店に入ると必ずと言っていいほどこの言葉を耳にする。これは村田沙耶香さんの作品「コンビニ人間」に何度も出てくる言葉だ。

なぜこの作品を手にとったのか、とても単純な理由がある。それは第155回芥川賞を受賞していることだ。それだけの理由ではない。とあるニュース番組で村田沙耶香さんの過去の作品とともに、彼女独特の考え方や作品の制作スタイルが紹介されていた。私一人では考え付かないような角度から物事を見据え、それを作品にしている。そのずば抜けた個性に私は興味をそそられたのだ。

彼女の考え方に惹かれた私は彼女の作品を六つ読むことにした。その作品のほとんどが家族や性に対する疑問を投げかけたものであった。身近すぎて深く考えることのなかった「家族」や「男女の関係」がテーマだったからこそ、作品を読んで私自身も深く考えこんでしまったり、時には憂鬱な気分になったりしたのだと思う。

私はここで深くそのテーマについて考えを述べるつもりはない。私が18年間生きてきた中で経験したことは、私とまったく同じ日に生まれた人でさえ違いが必ずある。この経験の差が物事を見る角度や幅を広げているのだと私は思っている。

実際、彼女の作品を読んで殺人の善悪について考えなおすきっかけとなった。殺人は絶対的な悪で人間のする